

岐阜県における古代・中世寺院の立地と変遷

小野木 学

はじめに

岐阜県では平成30年度から令和4年度までの5年間で「岐阜県古代・中世寺院跡総合調査」（以下、「総合調査」と記す。）を実施し、令和4年度末に報告書を刊行した（岐阜県文化財保護センター2023、以下、本文中の引用文献は「岐阜県文化財保護センター」を「県文財セ」、「市（町村）教育委員会」を「市（町村）教委」と記す。）。総合調査では、岐阜県文化財保護センターの職員が現地調査や整理等作業、報告書作成を実施し¹⁾、県内3,464か寺の現地確認を行い、1,918か寺の古代・中世寺院跡を見出し、現地で平場²⁾を確認した寺院跡（以下、遺跡名以外は「寺院」と記す。）のうち127か所の地形観察図を作成した。また、その総括では寺院の成立時期、立地、空間構造、宗派等の検討を詳細に行い、大きな成果を得た。しかし、寺院の成立年代等は「各自治体史等の文献資料、発掘調査・遺跡詳細分布調査資料（発掘調査報告書等）」に加えて、各地域・関係社に残る口承・伝承等を含めて集計」（県文財セ2023）しており、同報告書の各論で上川通夫氏が指摘しているように（上川2023）、文献史料と考古学的事実との整合的な理解が困難な寺院への対応が一つの課題として残った。

上川氏のいう考古学的事実とは、考古学的手法によって明らかとなった遺構・遺物等に関する事実である。かつて藤澤一夫氏は、『日本考古学講座』において、寺院の遺構を対象とする調査には発掘観察と表面観察による現状調査があるとし（藤澤1956）、文化庁文化財部記念物課が監修した『発掘調査のてびき』の「寺院の調査」でも、遺跡情報の事前収集項目として、最初に地表観察が挙げられている（文化庁文化財部記念物課監修2013）。

そのため、小稿では岐阜県で詳細分布調査や発掘調査が実施された主な古代・中世の寺院を対象とし、その立地と平場の配置を再検討した上で、それらの調査から推定できる寺院の存続年代等を整理する。そして、総合調査において文献資料等から得られた成果を含めて、県内における古代・中世寺院の変遷について検討したい。

1 岐阜県内の山麓・山腹に立地する主な寺院

岐阜県における寺院の創建は7世紀中頃から後半に始まり（井川1994、早川2003）、その頃の寺院の多くは平地に位置する。その後、山腹等での造営が増加していくが、具体的に岐阜県内における寺院の成立時期や立地の詳細に関する検討は牛丸岳彦氏や大下永氏などの論考（牛丸2011、大下2018）の他には、それほど多くはない。

一方、上原真人氏は「少なくとも畿内では、すでに7世紀代に、僧寺と尼寺、平地寺院と山林寺院というネットワークが形成されていた可能性が高い」（上原2002）とし、伯耆や三河でも畿内と同様の事例が確認できることから、その地域を「少なくとも畿内およびその周辺」とし（上原・梶川2007）、「平地寺院と山林寺院とがセットで機能するという情報が、7世紀後半に各地に伝播した」（上原2011）と推定した。このように、畿内を中心に寺院創建初期の段階から地方でも山林寺院の存在

が指摘され、畿内周辺に位置する岐阜県においても同様の状況であった可能性が考えられた。

なお、山林寺院とは、その名称を提唱された斎藤忠氏は「僧侶などが山林修行を目的として、建立した寺院」とし、「山麓、山間、山の懐、山頂付近などで、その周辺に叢林があって静寂な境地に立地しており、又その寺の寺域、建物も、その地勢に順応して定められて建立された寺」と定義付けられた（斎藤 1996）。修行本位かどうかの判断は難しい場合があるものの（梶川 2007）、小節では氏の定義に従い、山麓や山腹、山頂付近などに立地する寺院を対象とし、そのうち、詳細分布調査や発掘調査が実施された主な寺院について紹介したい³⁾。なお、寺院が立地する地形は山麓等（山麓、丘陵、尾根の先端付近等）、山腹等（山の中腹、尾根・山頂付近の鞍部等）、山麓から山腹等の3つに分けて記載する。

(1) 山麓等に立地する寺院

① 正家廃寺跡（恵那市）（図 1）

正家廃寺跡は北東から南西方向に連なる山塊の麓の河岸段丘上に位置する。段丘下の現集落と金堂跡との比高差は約 30 m、斜距離は約 300 m である。昭和 51～55 年度、平成 4～11・25～29 年度に発掘調査が実施され、東西 110 m、南北 70 m の寺域⁴⁾を有し、主要伽藍を法隆寺式に配置する古代寺院であることが判明した（恵那市教委 2000・2018）。築地で囲まれた寺域は伽藍地と東区に分かれ、金堂、塔、講堂、回廊は同一の主軸方位で建てられており、座標北に対して 6 度傾いている。また、8 世紀中頃には金堂基壇等が完成し、9 世紀後半の主要伽藍の火災を契機として 10 世紀前半頃には廃絶したことが判明した。正家廃寺は定型化した伽藍配置を有するが、北下がり地形上に位置しているため、伽藍の正面は集落域とは反対方向を向き、地形的には高所を正面に見据えていることが特徴である。

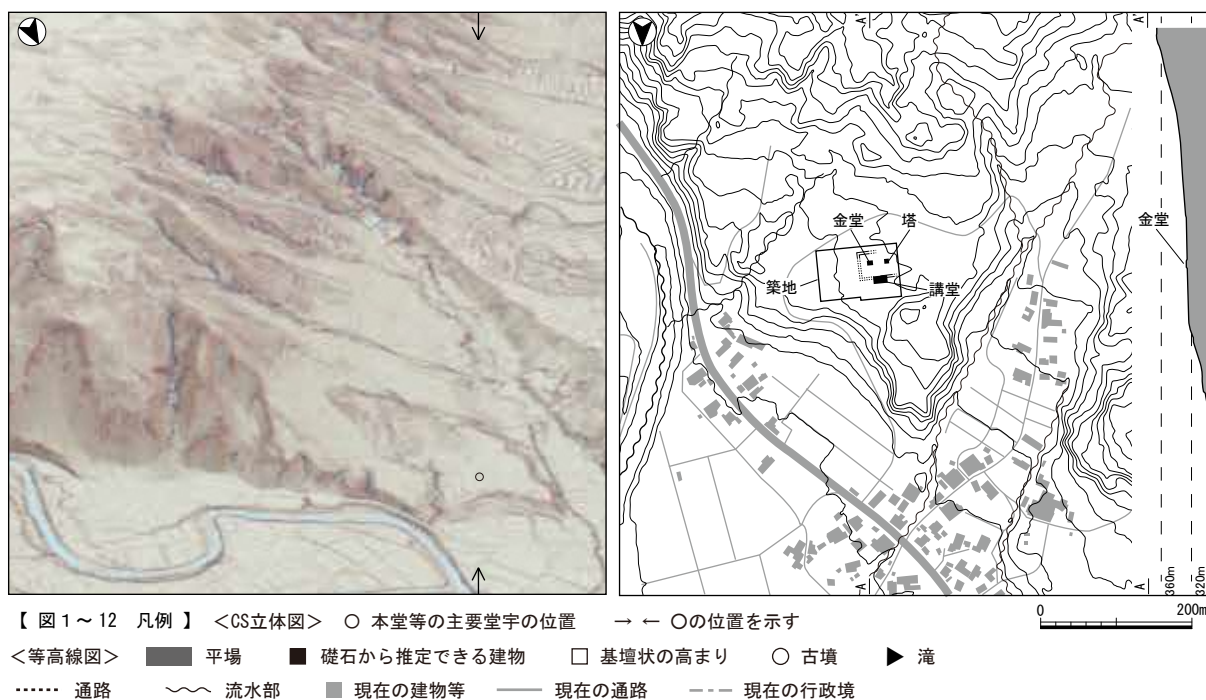


図 1 正家廃寺

置する小規模な単独の仏堂で、その麓には寺屋敷の仏堂に関与するような人々が住んでいた可能性が指摘でき、富永樹之氏は村落内寺院の一例としている（富永 2006）。

④柏尾廃寺跡、光堂寺廃寺跡、竜泉寺廃寺跡（養老郡養老町）（図 4）

南北に延びる養老山地の東山麓に位置し、南から北に向かって柏尾廃寺跡、光堂寺廃寺跡、竜泉寺廃寺跡がある。柏尾廃寺は柏尾谷と勢至南谷の間、光堂寺廃寺は勢至南谷と勢至北谷の間、竜泉寺廃寺は行平谷と威徳谷の間に位置し、いずれも谷川に挟まれた緩斜面上に平場が展開し、背面の山腹に窟や滝、墓域等が認められる。また、山麓に沿って近世伊勢街道が通過しており、現状では、街道からそれぞれの寺院まで直線的な通路（参道）が延びている。なお、寺伝や近世の記録では、いずれの寺院も天平年間（729～749）に建立され、永禄 5（1562）年に兵火により焼失したとされている。また、いずれの寺院も法相宗から天台宗に改宗している。

柏尾廃寺は、緩斜面の最奥に現状で 5 × 3 間以上の東面する建物の礎石が残り、ここが主要堂宇跡と考えられる。その北側には一辺約 4.5 m の石列を伴う基壇跡があり、昭和 14 年の調査では関市日龍峰寺の多宝塔（鎌倉時代）の礎石の配置と同一であることが指摘されている（小川 1939）。主要堂宇跡の東面には現集落から直線的な通路が延び、その両側には通路に直交する方向に複数の細長い平場が展開する。平場は現存徳寺付近まで確認でき、東西方向に延びる 2 条の通路によって約 100 m 幅で 3 列に区切られる。一方、主要堂宇跡の背面の山腹には墓域が展開し、多数の石塔が散在している。石塔の多くは「千体仏」（図 4 - 写真左上）と呼称される場所に集められており、ここでは複数の石塔未成品が確認できる（小野木 2019a）。また、墓域の北西側の谷筋には奥行 2～3 m の窟があり、窟の上方の尾根筋には集石が認められ、集石からは経筒片が採集されている⁵⁾。なお、窟の西側の谷筋を登ると小規模な平場が 3 段確認でき、ここでは鉄滓が採集でき、さらに登ると切り立った砂岩の露頭があり（図 4 - 写真右上）、そこには砂岩の剥片が堆積している。

光堂寺廃寺には緩斜面の最奥に日吉神社が位置し、そこに複数の礎石が残る平場があることから、ここが光堂寺廃寺の主要堂宇の一つであったと考えられる。日吉神社の西側から北側の山腹には巨岩や窟（図 4 - 写真左下）、墓域があり、窟は幅約 5 m、奥行約 4 m で、その内部には四方梵字を刻む一石五輪塔（若しくは二石五輪塔）や宝篋印塔の部材が確認できる。また、墓域では集石や石塔が散見でき、過去に古瀬戸瓶子が出土している。日吉神社から勢至南谷までの区域はやや傾斜が強くなるが、柏尾廃寺跡と同様に細長い平場が階段状に広がり、石仏等が散在している。そこには従来から複数の古墳の存在が知られており、平場造成の際にも古墳の墳丘を削平せずに残しているようである。その最奥の山腹は急傾斜ながら複数の平場が確認され、中世陶器が採集されている。さらに、その北側の谷筋には高さ約 2～5 m の段差が複数の箇所認められ、滝として景観が備わっている（図 4 - 写真右下）。一方、山麓の伊勢街道から光堂寺廃寺跡に至る辻には 16 世紀の文献史料が残る「勢至鉄座之址」があり、現在でも多数の鉄滓が採集できる。なお、応永 27（1420）年の「土岐善弘書状案」には光堂寺廃寺の寺地が記されており、その西端である一瀬山之峯は養老山地頂上の尾根付近と推定されている（養老町教委 2007）。このように、光堂寺廃寺では寺院地が山麓に展開しつつも、寺地は山全体に及んでいることが文献から推定できる。

竜泉寺廃寺は、緩斜面の最奥に複数の礎石が確認されており、ここが主要堂宇跡と考えられる。その前面には「堂の庭」と呼ばれる広い平場をはじめとして、階段状に造成された大小 60 以上の平場



柏尾廃寺跡 千体仏



柏尾廃寺跡奥にある山腹の露頭



光堂寺廃寺跡 窟



光堂寺廃寺跡奥にある滝

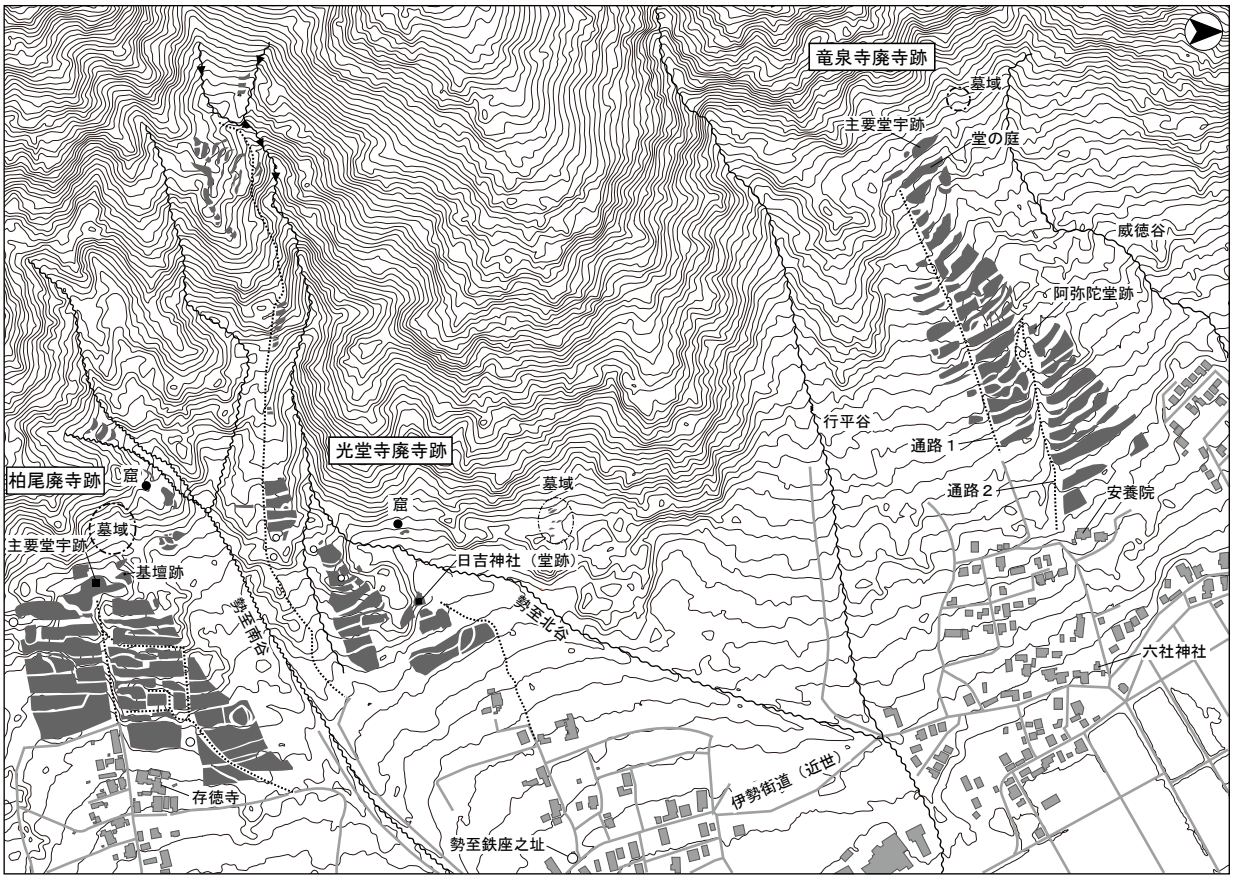


図4 柏尾廃寺跡・光堂寺廃寺跡・龍泉寺廃寺跡

が残る。この中央には東西約 360 m にわたる直線通路（通路 1）が延び、さらにその北側には谷地形を利用した通路（通路 2）があり、平場群を北側・中央・南側の 3 区域に分けている（養老町教委 2016）。通路 1 は「堂の庭」に至るまで南北両側に多くの平坦面があるものの、明確な出入口を認めることができないことから、この通路は「堂の庭」に至ることを主目的としていた可能性が指摘されている。一方、通路 2 は北側の平場の最奥に位置する「阿弥陀堂跡」に至る道であり、阿弥陀堂より下位にある平場群にアクセスできる出入口を各所で確認できる。なお、通路 2 は伊勢街道沿いの六社神社のある辻から竜泉寺廃寺跡に至る現道の延長に位置することから、竜泉寺廃寺には創建当初から伊勢街道付近まで通路が延びていた可能性が指摘できる。

さて、いずれの寺院でも遺跡詳細分布調査が実施され、寺院の存続時期が推定されている（養老町 2007・2016）。柏尾廃寺は本堂跡若しくはその北側で 8 世紀から 11 世紀後半までの遺物が採集されており、この頃には「山林修行場を思わせる場所をもっていた」とされている。そして、11 世紀末から 12 世紀後半の遺物分布域が拡大し、12 世紀末から 13 世紀前半の遺物量が多くなり、16 世紀後半以降の遺物は寺域の中心部では採集されていない。一方、光堂寺廃寺と竜泉寺廃寺は古代には機能しておらず、その始まりは 12 世紀初頭から後半であり、16 世紀後半に衰退するとされている。そのうち、竜泉寺廃寺跡の直線通路（通路 1）は、13 世紀末から 14 世紀前半頃に整備された可能性が高いとされている。

(2) 山腹等に立地する寺院

① 光寿庵跡・石橋廃寺（高山市）（図 5）

光寿庵跡は山腹の谷奥に、石橋廃寺は山麓に位置する。光寿庵跡と山麓の集落域との比高差は約 120 m、斜距離は約 430 m であり、光寿庵跡と石橋廃寺跡との比高差は約 120 m、斜距離は約 700 m である。光寿庵と石橋廃寺の成立年代に関する記録はないが、光寿庵は室町時代以降に地域の武将である広瀬氏の菩提寺であったという伝承があり、長野県大滝村資料館所蔵の鰐口には「飛州広瀬向上庵地蔵堂永享八年八月二四日」の銘文が残るように、15 世紀代までは存続していたようである。

光寿庵跡には山腹の谷部の最奥に広い平場があり、その中央付近には石列を伴う基壇が確認できることから、ここが主要堂宇跡と考えられる。その背面には湧水点から導水される池があり、前面にも広い平場が確認できるものの、平場に至る通路が虎口状に屈折するなど後世の改変が認められる。また、本堂から南へ約 80 m の高台には一辺約 6 m の方形の基壇状の高まりが確認でき、その中央には石塔が据えられ、平場の周囲には土塁と溝が巡る。光寿庵跡では 7 世紀後葉の須恵器や古代瓦が昭和初期に採集されており、古代瓦には人物を描いた戯画瓦もある（国府町史刊行委員会 2011）。

石橋廃寺は昭和 60・61 年度に発掘調査が実施され、礎石建物が検出された（国府町教委 2005）。その出土遺物には円面硯や暗文土師器、複数の古代瓦などがあり、特に平瓦に線刻された人物戯画や鳥描戯画、花卉文などが注目できる。さらに、光寿庵跡と同范の瓦が出土しており、人物戯画瓦の存在も共通している。石橋廃寺の出土遺物の時期は 7 世紀後葉～10 世紀であり、特に 7 世紀末～8 世紀にかけては暗文土師器や新羅系軒丸瓦、重圏文軒丸瓦などの出土から近畿の文化内容が色濃く反映されていると推定されている⁶⁾。このように、光寿庵跡と石橋廃寺跡は同范瓦の存在から同時期に存在していた可能性が高く、少なくとも 8 世紀以前において山麓と山腹に対置した宗教施設として機能していたと考えられる⁷⁾。

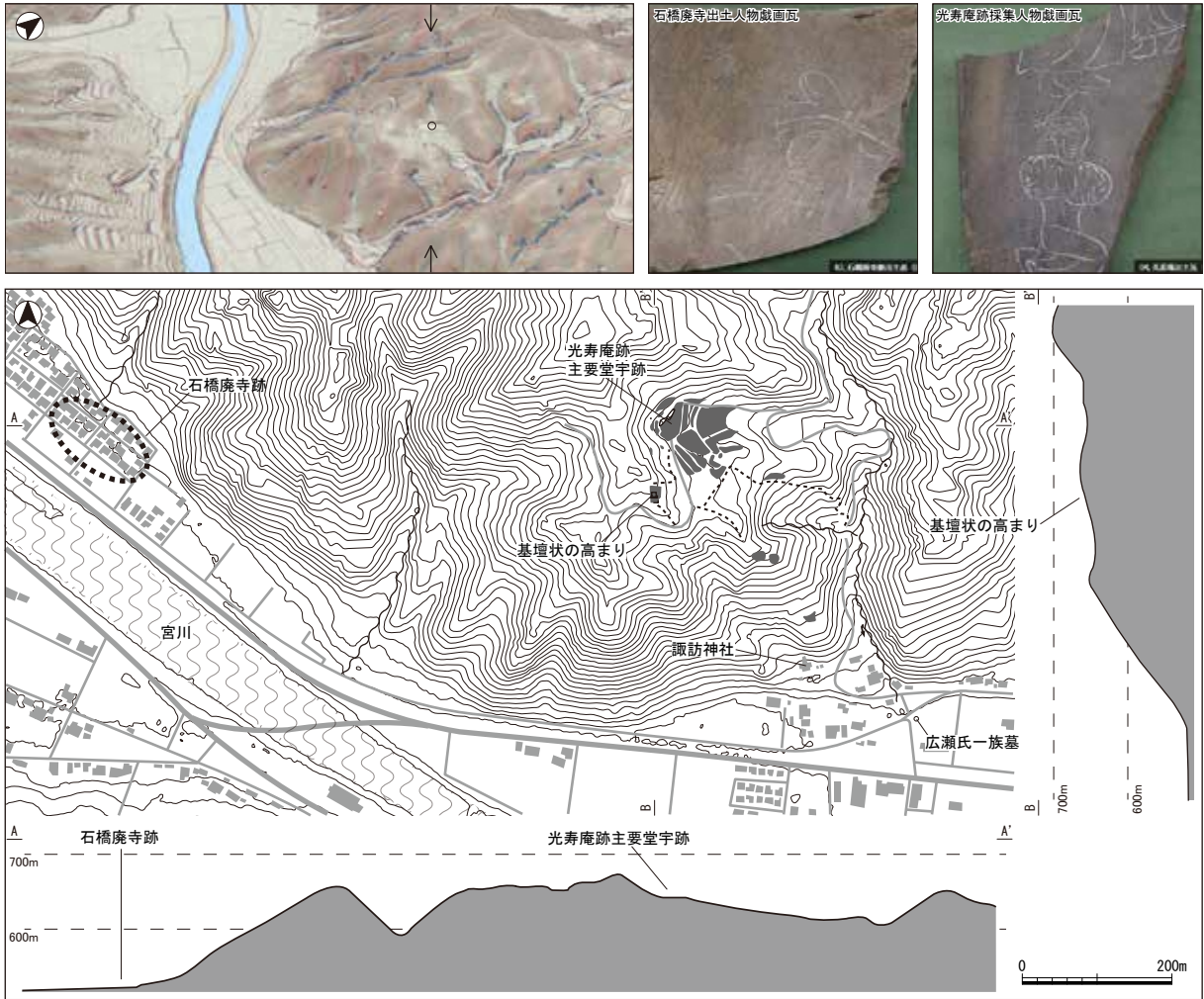


図5 光寿庵跡・石橋廃寺跡（右上の2枚の写真は高山市教育委員会提供）

②横蔵寺旧境内（揖斐郡揖斐川町）（図6）

山頂から延びる尾根の鞍部に位置する天台宗の寺院であり、山麓の集落域と旧境内本堂跡との比高差約260m、斜距離約650mを測る。横蔵寺縁起では延暦22（803）年に、この地に草堂を建てたとされ（坂本1982）、永禄8（1565）年に織田信長が寺領を没収したため伽藍が荒廃し、寛永元（1624）年に古堂の閉鎖と山麓への仮堂設置が行われたとされる。

本堂跡とされる場所は谷の最奥に位置し、基壇上に5×5間の礎石建物を有し、その右手に池が残る。さらに右手前の高位の平地には塔跡と考えられている礎石を有する基壇が確認でき、本堂跡から池と塔が一望できる景観であったと考えられる。また、谷の左手前には仁王門とされる3×2間に配置された礎石群があり、そこから等高線に沿って延びる通路の両側には、等高線に沿うような細長い平地が展開している。本堂横の池の周囲では湧水が認められ、本堂跡の背面には巨石の露頭がある。また、墓域は集石を伴い、本堂から丸山を挟んだ西側の尾根に位置する。なお、本堂跡の礎石建物の方位は地形に沿っており、本堂正面の斜面や仁王門から本堂跡に至る通路沿いには石積みを確認できる。

横蔵寺旧境内では詳細分布調査がなされ、灰釉陶器や中世陶磁器が採集されている（県文財セ2023）。灰釉陶器は本堂跡において1点のみが採集され、その型式は黒笹90号窯式（9世紀後半）⁸⁾

である。一方、中世の陶磁器は多く採集され、特に山茶碗第5型式（12世紀後半～13世紀前半）前後の遺物が多い。灰釉陶器の採集は1点のみであるが、現在の横蔵寺には奈良時代末から平安時代初頭の作と考えられる銅造薬師如来立像が残され（清水 1990）、横蔵寺縁起による成立年代も加味し、現時点では、横蔵寺旧境内には9世紀後半頃に本堂跡を中心とする範囲に小規模な仏堂等が存在していたと考えたい⁹⁾。そして、採集遺物が多数ある12世紀後半から13世紀前半頃に本堂跡を中心とする谷部において寺院地が整備されたと考える。また、報告された採集遺物のうち最も新しい遺物は山茶碗第8型式（13世紀後半から14世紀前半）であるが、現地に現存する石塔には扁平化した組合せ五輪塔の部材や一石五輪塔など16世紀後半に位置付けられる（小野木 2019b）ものも散見される。

なお、横蔵寺旧境内から尾根伝いに約4300m南東に進むと、華厳寺に到達する。華厳寺は平地から延びる谷の最奥に位置し、延喜年間（901～923）に額を与えられた定額寺に列する寺院であり（菱田 2023）、平安時代の早い時期の作とされる毘沙門天立像が残る（清水 1990）。発掘調査等は実施されていないものの、文献や有形文化財の存在から平安時代には機能していた可能性が指摘できる。そして、地元では華厳寺を「谷の寺」、横蔵寺を「山の寺」と呼称しているように、両寺は現在でも平地と山地にある一連の寺院として認識されていることから、過去にも尾根筋を利用した往来があった可能性がある。

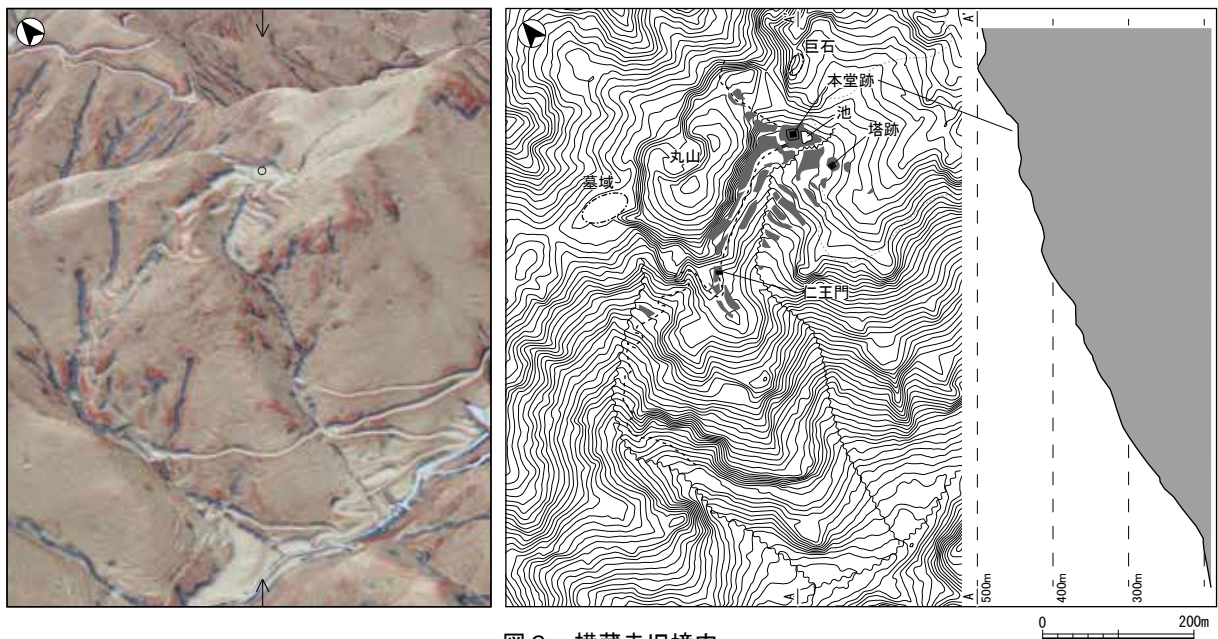


図6 横蔵寺旧境内

③白雲山観音堂（郡上市）（図7）

標高471mの白雲山山頂から南へ延びる尾根の鞍部に位置し、山麓の集落域と本堂跡との比高差約130m、斜距離約310mである。昭和48年と平成5・6年に発掘調査が実施され、礎石建物や中世墓が検出されている（名古屋大学考古学研究室編 1974、大和町教委 1994）。

発掘調査では、最も高所にある広い平場からは建物等の遺構が検出されず、その一段下位の東端の平場にて5×5間の礎石建物が検出され、礎石下の炭化材の年代測定結果（AD1240年±90年）から鎌倉時代以降の建物と推定された。建物の主軸方位は真北ではなく、平場の長軸に沿う方向である。また、この平場からは中世陶器とともに10世紀代の灰釉陶器が複数出土している。一方、最高所の

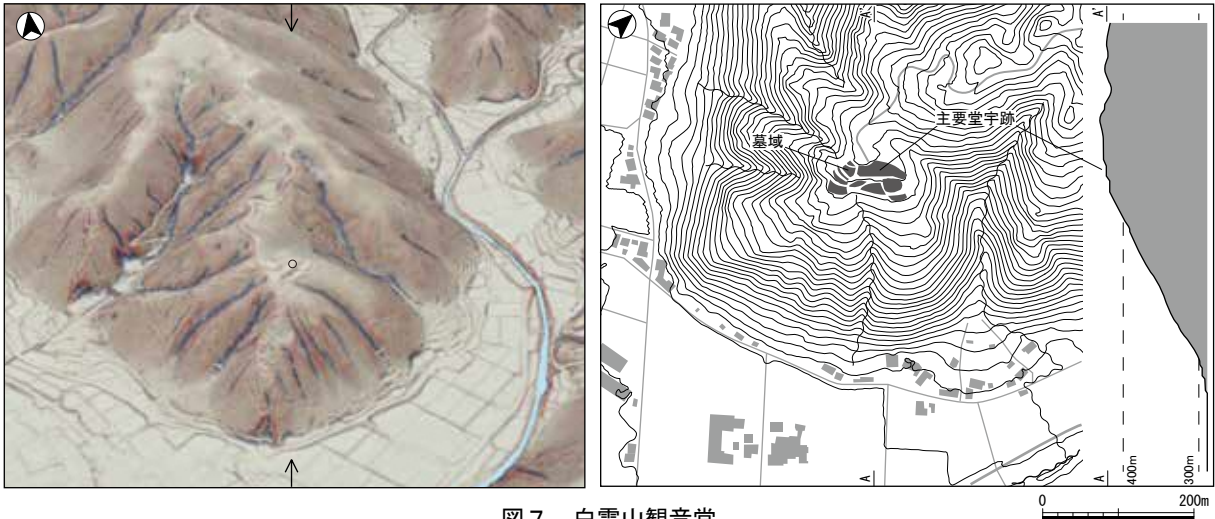


図7 白雲山観音堂

平場からは懸仏の御正体である聖観音の金銅仏（座高9cm）が出土しており、他にも天保14（1843）年に山上で懸仏が採集されている（佐藤編2019）ことから、この平場に主要堂宇があったと推定したい。なお、最高所の平場の西端では、中世後期の石塔や集石遺構、蔵骨器などが検出され、墓域を形成していることが判明した。墓域の出土遺物は古瀬戸前Ⅱ期から後Ⅰ・Ⅱ期（13世紀前半から15世紀前半）までの壺・瓶類や美濃須衛水注（藤澤2001）などとともに、一字の「福」の字を陽刻した高さ4.2cmの銅製印もある。このように、発掘調査の結果、本寺院では10世紀代に何等かの小規模な宗教施設があり、13世紀頃には主要堂宇が創建され、15世紀代には衰退したと考えられる。

④大威徳寺跡（下呂市）（図8）

標高約1,400mの拝殿山から南西に延びる尾根の先端付近の、旧益田郡と恵那郡の境に位置する天台宗の寺院である。文政12（1829）年に校訂、浄書された『飛州志』に引用された『濃州長滝寺阿妙院所在経文末書』から推定される大威徳寺の寺地は南北約6km、東西約5kmと推定され（下呂市教委2007）、その中央に位置する御厩野集落と本堂跡との比高差は約190m、斜距離約940mを測る。『飛州志』などによると、本寺院は源頼朝発願で文覚上人創建の伝承をもち、弘治2（1556）年の威徳寺合戦で堂塔の多くを焼失し、天文13（1585）年の飛騨大地震で壊滅したと伝えられている。

本寺院跡は、平成15～20年度に範囲確認調査が実施され、本堂、本堂西建物、山門、拝殿、鎮守などの建物跡と池跡、中世墓などが検出された（下呂市教委2007・2011）。本堂跡は桁行5間の北向きの礎石建物で、正面には向拝が取り付けられる。本堂西建物跡は4×3間の北向きの礎石建物で、本堂跡と同様に向拝が取り付けられ、本堂と軒廊で連結している。山門跡は3×2間に配置された礎石が検出され、山門から本堂跡に向かって緩やかに上る直線的な通路が延びる。本堂跡から東方の尾根斜面には5×2間の西向きの礎石建物跡と、さらにその奥の尾根頂部には5×4間の西向きの礎石建物跡が検出され、前者は拝殿跡、後者は鎮守跡と推定されている。なお、拝殿跡の前面には高さ約4mの石積が残り、その北側には湧水点がある。一方、本堂跡の北北西には、林畑谷を挟んだ緩斜面上に地形に沿って配列された中世墓が検出されている。なお、本寺院からは折戸53号窯式期～東山72号窯式期（10世紀前半～後半）の碗・皿類や多口瓶が出土しており、10世紀代から信仰利用が始まったと考えられる。そして、寺院創建は出土遺物や本寺院で発見された懸仏の存在などから12世

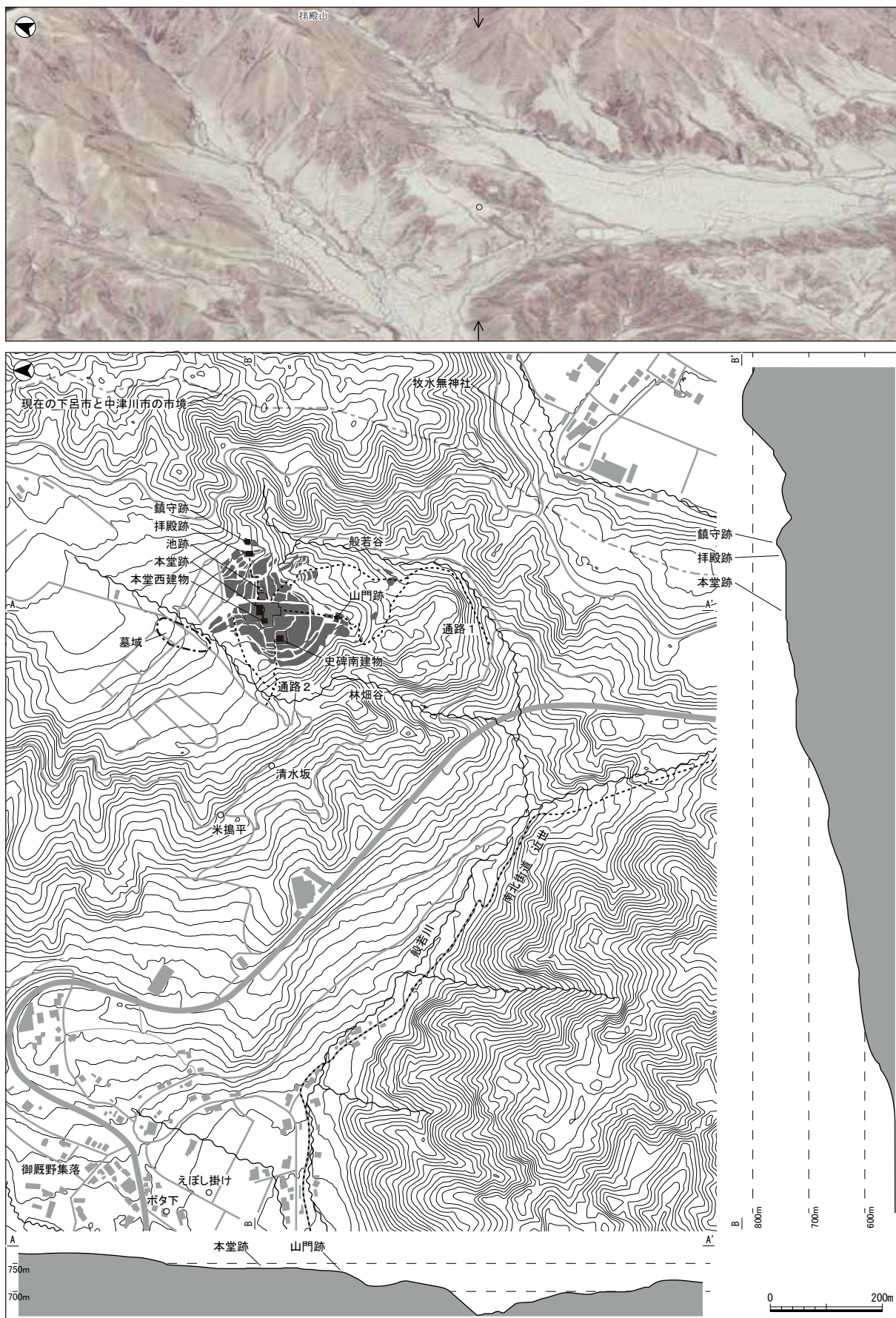


図8 大威徳寺跡

紀に遡る可能性が指摘され、13世紀代に規模が拡大し、およそ17世紀代までの遺物が出土している。

このように、本寺院は北東から南西方向に延びる尾根上に位置するものの、本堂などの建物の向きや本堂から山門に至る通路などは真北を意識しており、古代的な要素を保持している。また、拝殿跡や鎮守跡などを除くと平場間の高低差が比較的小さいこと、方形あるいは長方形を意識して区画された中央付近の平場とその外縁にある地形に沿って弧を描くように整地された平場があること、本殿跡を中心に東西方向にも通路が延びていること、などの特徴も看取できる。

一方、寺域外の山麓と本寺院を結ぶ通路は、山門や本堂付近から般若谷へ延びる通路1と、史碑南建物付近から西へ延びる通路2が想定できる。通路1は美濃と飛騨を結ぶ当時の主要街道（近世の南北街道付近（岐阜県教委1983））から般若谷筋を通り、寺院まで延びていたと考えられ、寺院の入り口には山門が設けられている。一方、通路2は御厩野集落と寺院を結び、その途中には米搗平や清水坂の名称が残る。御厩野集落から本寺院までは比較的緩やかな緩斜面が続き（図8 B-B'）、その最奥の高所に鎮守・拝殿が位置し、さらに、その背面の般若谷を挟んだ対岸に美濃・飛騨の国境となる山稜が延びている。なお、美濃側の最も近い平地には牧水無神社があり、この付近には「威徳寺関係の堂塔遺址が多い」とされている（加子母村1972）。

⑤円興寺旧境内（大垣市）（図9）

山頂から延びる尾根の鞍部に位置する天台宗の寺院であり、山麓の集落域と旧境内本堂跡との比高差約105m、斜距離約560mを測る。寺伝では延暦9（790）年にこの地に仏堂が建てられ、天正2（1574）年に織田信長の兵火にかかり焼失し、その後、慶長6（1601）年に雷火によって再び焼失したとされる。

寺院地は通路1・2沿いに展開しており、通路3には「山門」¹⁰⁾と呼ばれる3×2間に配置された礎石群がある。「山門」から東斜面に沿って延びる道は金生山への「虚空蔵道」であり、北へ延びる道が主要堂宇の展開する平場への参道となる。通路2のある谷部の平場は、等高線に沿うような細

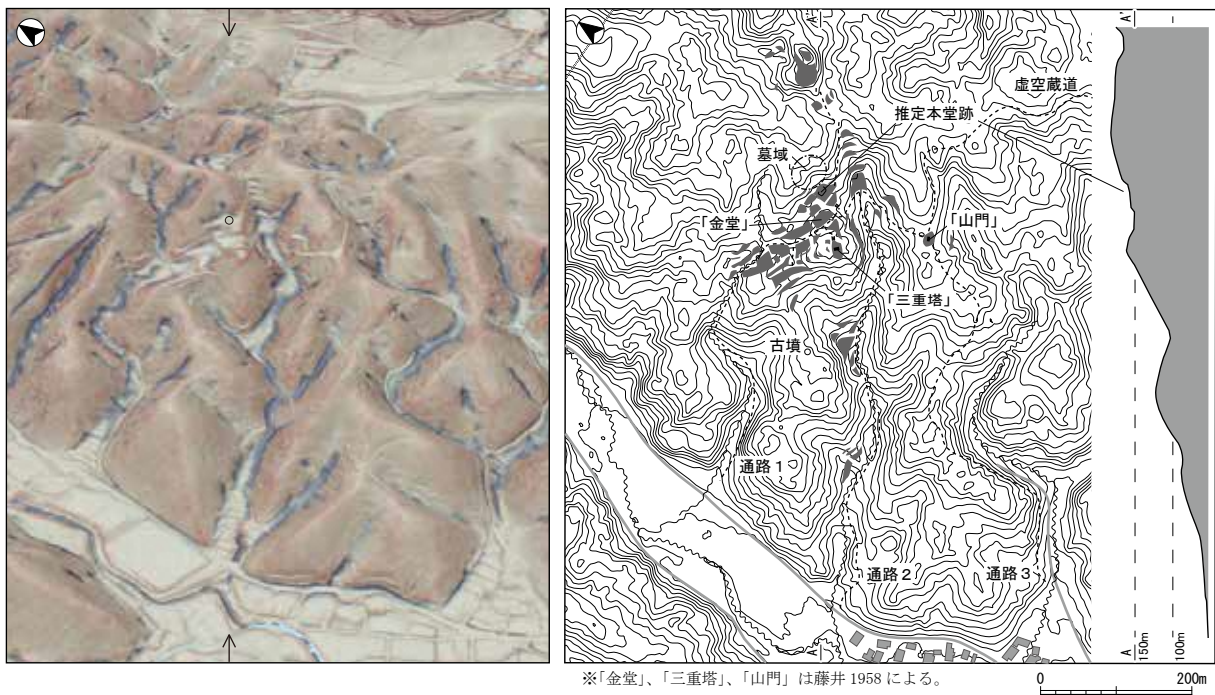


図9 円興寺旧境内

長いものと、その最奥に階段状に展開するものが認められる。また、山腹にある平場は通路1の南北に展開し、「金堂」とされる平場の背面には石積みが残る。また、「鐘堂」とされる最奥の平場が最も高く、その法面には高さ数メートルの石積みを確認できることから、現段階ではこの場所に本堂があったと推定したい（以下、「推定本堂跡」と記す。）。推定本堂跡の中央には南面する基壇状の高まりが確認でき、その背面の斜面には墓域が展開している。一方、通路1の南側の高所には「三重塔」とされる平場があり、複数の礎石が確認でき、遠方を見渡すことができる。

円興寺旧境内では平成元～8年度に詳細分布調査がなされ、中世陶磁器や石製品が採集されている（大垣市教育委員会1997）。山茶碗は第5型式（12世紀後半～13世紀前半）以降の時期であり、墓域では経筒と考えられる遺物も採集されている。現円興寺には平安時代の早い時期の作とされる聖観音立像があり（清水1990）、寺伝によれば延暦9（790）年に仏堂が建立されたとあるため、その成立時期は平安時代前半まで遡る可能性がある。しかし、詳細分布調査では灰釉陶器が採集されていないため、現時点では、円興寺旧境内は少なくとも12世紀後半～13世紀前半頃には成立しており、採集された鉢や天目茶碗の時期から15・16世紀頃までは存続していたと考えたい。

なお、「山門」から「虚空蔵道」を経た先の金生山には明星輪寺が所在する。明星輪寺の本尊は虚空蔵菩薩であり、「虚空蔵道」の名称の由来となったと考えられ、円興寺旧境内の金堂付近から明星輪寺までは直線距離で約1500mである。明星輪寺は延暦20（801）年に再興したとされ、11～12世紀前半の地藏菩薩半跏像（清水1990）や久安4（1148）年銘の如法経碑、鎌倉時代の作である木造金剛力士像、明德癸酉（1393）銘の梵鐘など、多数の文化財が残る。そのため、明星輪寺は少なくとも12～14世紀には活動しており、円興寺旧境内と明星輪寺は尾根筋を利用した往来が可能であったと考えられる。

⑥弓削寺旧境内（揖斐郡池田町）（図10）

池田山の東山腹に展開する臨濟宗の寺院であり、弘仁8（817）年に創建され、慶長7（1602）年に現境内に移転したとされる。寺院地は現境内を含めて3箇所を確認でき、それぞれ時期が異なる。なお、山麓の集落域と1時期目の主要堂宇との比高差は約120m、斜距離は約450mを測る。

最も古い寺院地（1時期目）は、現弓削寺から北西側の山腹に展開する。谷奥に幅約100m以上の広い平場があり、その南端に長さ約50mの基壇状の高まりが認められ、その背面には湧水点がある。この広い平場に主要堂宇があったと考えられ、その前面に延びる谷の両側にある尾根筋には、台形から三角形の平場が階段状に展開する。この寺院地では、過去に山茶碗、平瓦、三筋壺、四耳壺などが採集され（池田町教委1991）、近年では第4型式（12世紀中葉）以降の山茶碗が確認されている¹¹⁾。また、中世後期の石塔類が確認できないことから、現状では少なくとも12世紀には機能しており、15・16世紀頃には衰退したと考える。なお、この寺院地の山麓には平安寺が所在する。平安寺は応徳年間（1084～1087）の創建とされ、平安寺の墓地には14世紀代と考えられる大型五輪塔2基と永和元（1375）年銘、貞治5（1366）年銘の宝篋印塔が所在し（三宅ほか2011、横山1996）、現本堂の南側に複数の平場を確認できる。このように平安寺と弓削寺の1時期目の寺院地は同時期に存在していた可能性があり、しかも、平安寺の南東部で弓削寺から延びる複数の谷の水が1箇所に集まるなど、両寺は山上と山下にある信仰施設として関連があったと考えられる。

2時期目の寺院地は、現弓削寺から西側の扇状地上に遺構が確認できる。現弓削寺から高所に向か